

少年時代の原風景 ～ 『鵜鷺メデイカル・ビレッジ構想』 ～

2024年5月1日島根大学医学部地域医療教育学講座で、今年4月から開講された医学科・看護学科1年の『医療倫理・プロフェッショナリズム(生命科学の歴史と論理)』の講義『がん哲学 ～ コロナ時代の哲学 ～』＜受講学生数 約160名＞に赴いた。医学部長 石原俊治先生と面談し、講義に向かった。真摯な学生の姿には大いに感動した。長尾大志先生（地域医療教育学講座 教授）の司会で、学生からの質問も寄せられた。

毎年、島根大学医学部の病理学の講義を企画して頂いた並河徹先生(定年退職後、島根大学 学術研究院医学・看護学系 特任教授)ご夫婦と夕食した。大変、有意義な充実した時であった

鵜峠の実家で一泊し、翌朝、鵜峠区長、鵜峠婦人会長に挨拶し、海辺を散策した(画像)。その後、廃校になった鵜鷺小学校の校地、そして、鵜鷺(うさぎ)コミュニティセンター(廃校になった鵜鷺中学校)を訪問し、センター長の原勝則氏との面談の時をもった。廊下には、『生徒信条』(画像)が、掲載されていた。鵜峠+鷺浦(隣の村)＝鵜鷺(うさぎ)で、鵜鷺地区の世帯数(95世帯)と人口(157人)(2024年3月末現在)である。鵜峠は、37名、空き家60%であろう。筆者の夢は、『鵜鷺メデイカル・ビレッジ構想』(画像)である。

今から1300年前、712年に編纂された『古事記』に登場する医療の原点を教えてくれる大国主命の出雲大社から、8キロほど、峠を越えて美しい日本海に面した小さな村が、筆者の生まれ育った出雲市大社町鵜峠である。隣の鷺浦地区と合わせて、鵜鷺と呼ばれている。713年に編纂が命じられたという『出雲国風土記』にも登場する歴史ある地である。

故郷(島根県出雲大社鵜峠)は無医村であり、幼年期、熱を出しては母に背負われて、峠のトンネルを通して、隣の村(鷺浦)の診療所に行った体験が、今でも脳裏に焼き付いている。筆者は、人生3歳にして医者になろうと思ったようである。小さな村での少年時代の原風景が、人生の原点である。



生徒信条

一、知性をみがき個性
豊かな生徒になろう
一、明るく協力し合う
生徒になろう
一、根気強く最後まで
やりぬく生徒
になろう
一、心身ともに健康な
生徒になろう

特別寄稿

鶴鷄メディカル・ビレッジ
構想

植野 興夫
(福見小学校、福見中学校、北宮高校 卒業生)



人間は、自分で「運命の方向」を設定できると信じているとしても、「人間の方向は期待通りに進められる」とであると言葉三郎は「学びの場」を築き上げている。その時、その人らしさの個性が現れるのである。言葉三郎は、「明治が西洋の教科書でも、私は今や自らごの志を述べ、行方を記すものである。」「世間の何より大切なものは何か」といふことと知ることは、「四書五経と易経の」の目覚めへ来る。「神代文書と神代文書」は「歴史の物語」である。「書生生活の場」にない。夢のなかの夢の方向性が「人間の運命」の如く来る。「ゴッホ」は人間、人間にあっては「夢」の方向性を示すのである。

[illegible][illegible]

メディアカルビレッジ構想の理念を語る橋野興夫教授／出雲市大社町鷺浦、鷺浦コミュニティセンター



「がん哲学外来」の鶴鷄コミュニティセンタ―であった。地元出身の樋野教授は住民約50人を前に、鶴鷄地区で実現を目指す「メデ

順大医学部教授 古里で構想語る

鵜鷺(出雲)に医療村を

樺野教授は病理・腫瘍学が専門で、2008年に医師と患者が対等の立場で語り合う「がん哲学外来」を都内で開設。お茶を飲みながらじっくり耳を傾け、がんを通して人生を考える独特のスタイルは全国に広がる。

講演で、幼少期に地元の高齢者たちが後ろ